

発明クラブからの出発

杉江芽依さんは、同年代の子供たちと同じように幼い頃に東日本大震災を経験しましたが、直接の記憶はありません。しかし、震災被害の情景を目にする機会があり、たくさんの被害の記録を見ていくにつれ、震災を防ぐことはできなくても、その被害、特に家の中での被害を最小限にすることは可能なのではないか、と考えました。

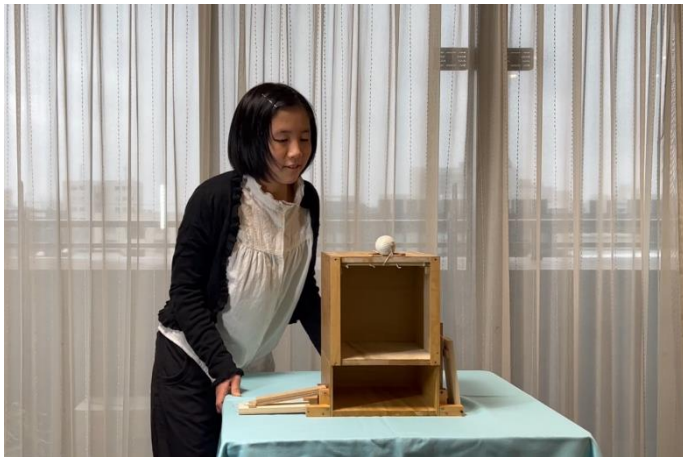
革新的なアイデア

2020年、当時小学校6年生だった芽依さんは、テレビで大震災についての特集番組を見ていた時、地震などの急な動きに反応するシャッター付き棚のアイデアを思いつきました。この様な棚があれば、棚さえ安全に設置することができれば、棚の中身の落下を防ぐことが出来ると考えたのです。発明の構造を図に描き、力学の知識を使って試作品を完成させました。さらに、試行錯誤と発明クラブの先生や両親からのサポートを得て、試作品を改良することに成功しました。アイデアが浮かんでから4か月後に完成した、「感震シャッターとコンパクト転とう防止で安心だなー」は、発明クラブの推薦を受け、公益社団法人発明協会の[第79回全日本学生児童発明くふう展](#)(2020年度)にて奨励賞を受賞しました。



Credits 杉江芽依

そして、この発明が評価され、WIPO アカデミーの[IP4Youth&Teachers](#) プログラムの国際ワークショップにも参加し、[知的財産](#)が今後実現される発明やアイデアを保護する上で重要な役割を果たすことや、[TRIZ](#)について学びました。



Credits 杉江芽依

「創り出すことでしか得られない感動や面白さがあります。あったらいいなと思ったり、便利になったらいいなと想像したものが、形になるのが楽しいから、何か発明してみたいと思いました。」-杉江芽依さん

クラブの一員として

芽依さんは幼い頃から創造力を発揮し、小学校に入学する前から折り紙でアイデアを具現化してきました。両親に勧められて地域の発明クラブに入会し、友達の輪を広げ、発明に役立つヒントやコツについて学びました。発明クラブでは、クラブの一員として工作教室や創造コンテストに参加することができました。

現在は、刈谷少年少女発明クラブのチームの一員として、創造力を使い問題解決に挑む [Odyssey of the mind 2022 World Finals](#)（2022年4月）の出場に向けて準備をしています。



Credits 杉江芽依

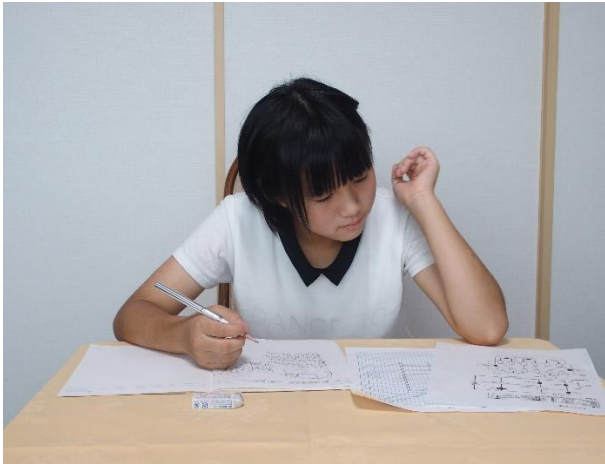
「地域や地元企業のお祭りの工作教室によく参加させてもらい、いろいろな工作を体験しました。おもちゃや面白い物ができあがるのが楽しくて、そんな工作がたくさんできることにひかれて発明クラブに入りました。」

－杉江芽依さん

芽依さんのお手本は、チャレンジ創造コンテストに一緒のチームとして参加した発明クラブの友達です。この友達は、既に沢山の賞を受賞しているにもかかわらず、最後まで挑戦し続けるのです。また、発明クラブの先生からは、発明を具現化するために必要は技術的知識を教えてもらいます。例えば水の力やゴムの力の利用など、発明のデザインや力学的要素について先生と相談し、アドバイスを得て発明を試作品へと近づけていきます。先生は、試作品を作るにあたって必要な素材や試作品のサイズについても芽依さんに助言します。発明クラブで身に着けた知識は、学校でも、とりわけ芽依さんの好きな科目である理科と歴史の授業にも役立ちます。

次なるアイデア

芽依さんは、地域の助けとなるように、祖父母や高齢者のために、筋肉の動きを必要とする日々の作業を補助できるようなツールを開発したいと考えています。発明クラブのメンバーとして、日々発明に向けて努力しています。学校の宿題や、家事の手伝い、習い事がない時間は、読書や、和太鼓を聞いたり演奏して過ごします。また、そにしけんじ氏の「[ねこねこ日本史](#)」の鑑賞もアイデアを生み出すための休息の時間となっています。



Credits 杉江芽依

「うーんと考えているときには思いつかなくて、何気なく生活している中で、ふと困った場面を思い出したようなときにアイデアを思いつきます。勉強や手伝いが終わって、ほんと休憩しているようなときに、「どうすればいいかなあ・・・。」と何気なく思い出していると、パッとひらめくことがあります。」

－ 杉江芽依さん